

◆ 今週のコメント

- ・ A型肝炎の報告が1例あり、本年2例目となっています。京都市衛生環境研究所では、感染源の共通性を見出すため、ウイルス株の解析を行っていますので、医療機関におかれましては、届出の際に、糞便検体の提供をお願い致します。
- ・ 手足口病の定点当たり報告数は、0.68(28例)で、大きな増加は見られませんが、依然として過去5年平均値を上回っており、夏季の流行ピークに向けて患者数の増加が懸念されます。
- ・ 水痘の定点当たり報告数は、1.71(70例)で、3週連続で増加しています。年齢階級別では、2歳(18例)、3歳(16例)、4歳(15例)、1歳(9例)の順に多く、1歳～4歳が82.9%を占めています。
- ・ 感染性胃腸炎の定点当たり報告数は、8.39(344例)で、先週に比べ増加しています。第14週から連続して過去5年平均値を上回っています。
- ・ 麻しん臨床診断時における検査診断の協力依頼について
本市では、確実なサーベイランスの実施のため、病原体検査を行っています。医療機関におかれましては、臨床診断例での届出の際に、検査検体(咽頭スワブ、抗凝固剤入り血液、尿)の提供に御協力をお願い致します。

◆ 今週のトピックス: <流行性耳下腺炎>

流行性耳下腺炎の定点当たり報告数は、1.44(59例)で、本年で最も多くなっています。詳細をトピックスに掲載しています。

◆ 発生状況

全数報告の感染症

- ・ 二類:結核 2例(肺結核 2例, 肺外結核 なし, 無症状病原体保有者 なし), (喀痰塗抹陽性 1例)
【1月以降の累積報告数 95例(肺結核 59例, 肺外結核 21例, 無症状病原体保有者 15例), (喀痰塗抹陽性 21例)】
- ・ 四類:A型肝炎 1例【1月以降の累積報告数 2例】
- ・ 五類:ウイルス性肝炎(B型) 1例 (第18週分)【1月以降の累積報告数 1例】

定点報告の主な感染症

(市内定点数 インフルエンザ定点68, 小児科定点41, 眼科定点10, 基幹定点1)

定点	感染症名	定点当たり報告数	報告数
インフルエンザ	インフルエンザ	0.04	3
小児科 (降順5位まで)	① 感染性胃腸炎	8.39	344
	② 水痘	1.71	70
	③ 流行性耳下腺炎	1.44	59
	④ A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	1.20	49
	⑤ 手足口病	0.68	28
眼科	流行性角結膜炎	0.30	3

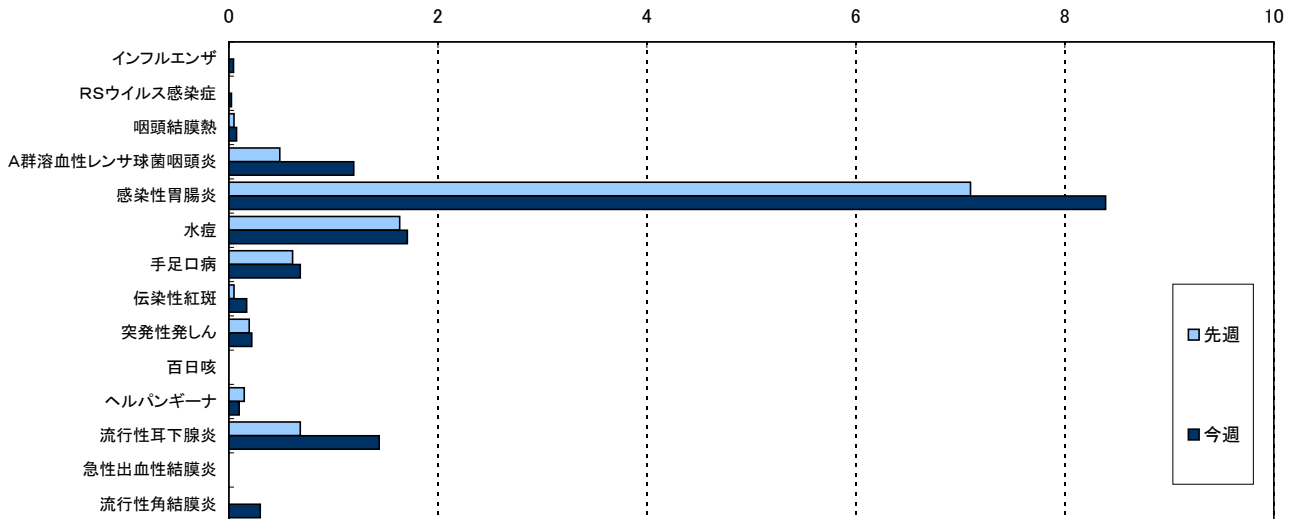
【次ページ以降の主な内容】

発生状況の概況グラフ / 今週のトピックス: <流行性耳下腺炎>

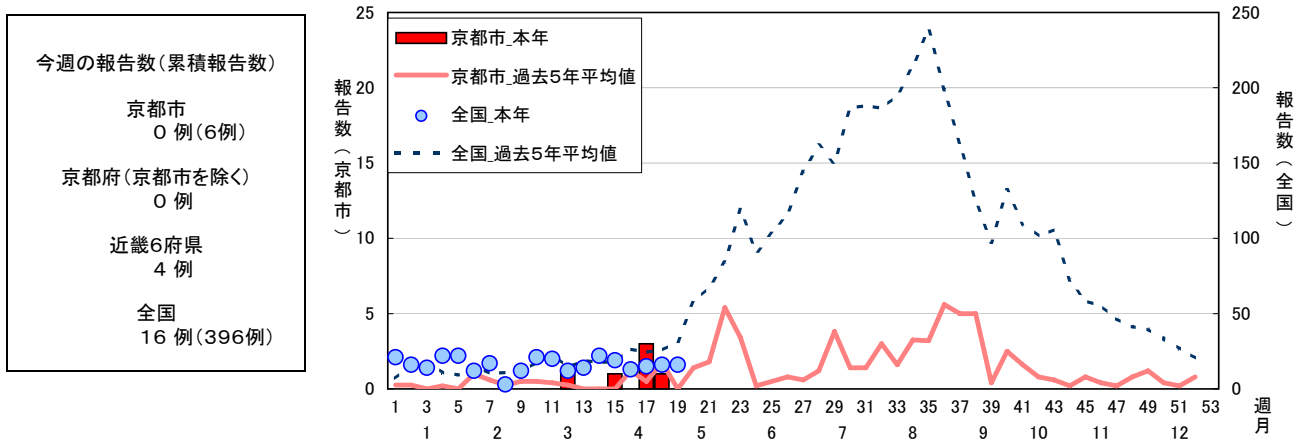
(注) 京都市のデータは、平成22年5月20日現在の報告数で、全国の還元データと若干異なる場合があります。
また、本情報での患者数は、届出医療機関所在の保健所での集計で、患者の住所を示すものではありません。

◆ 発生状況の概況グラフ

1 今週(第19週)と先週(第18週)の定点当たり報告数の比較

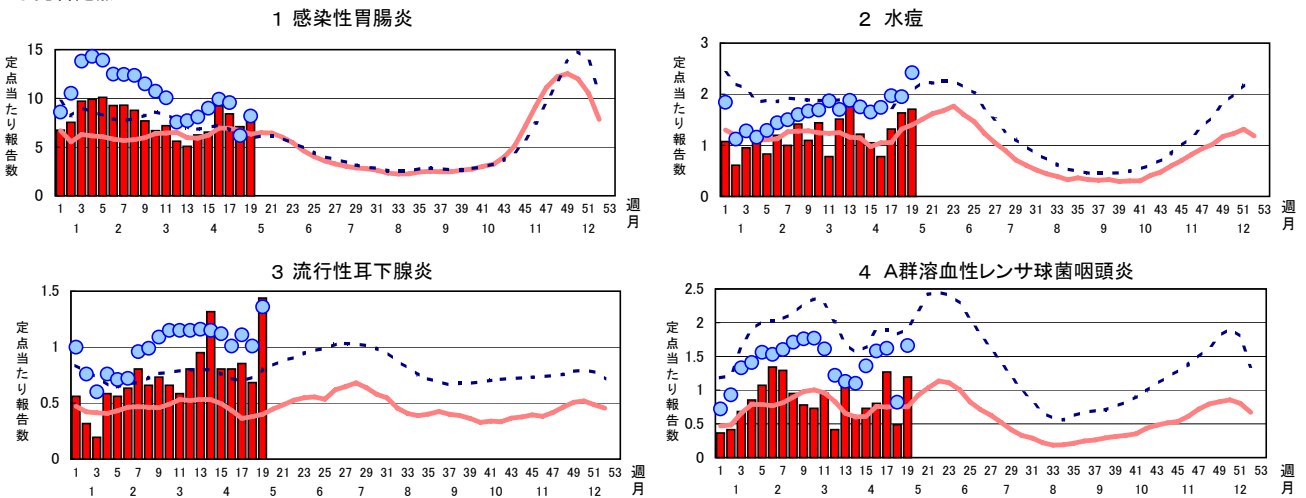


2 腸管出血性大腸菌感染症(三類感染症)の推移

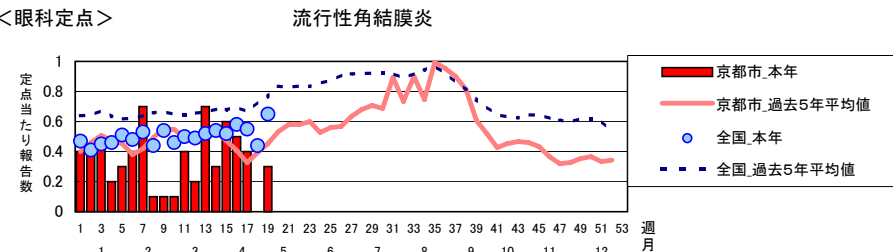


3 主な感染症の定点当たり報告数の推移

<小児科定点>



<眼科定点>



第19週(5月10日～5月16日)トピックス: <流行性耳下腺炎>

流行性耳下腺炎の定点当たり報告数は、1.44(59例)で、本年度で最も多くなっています。

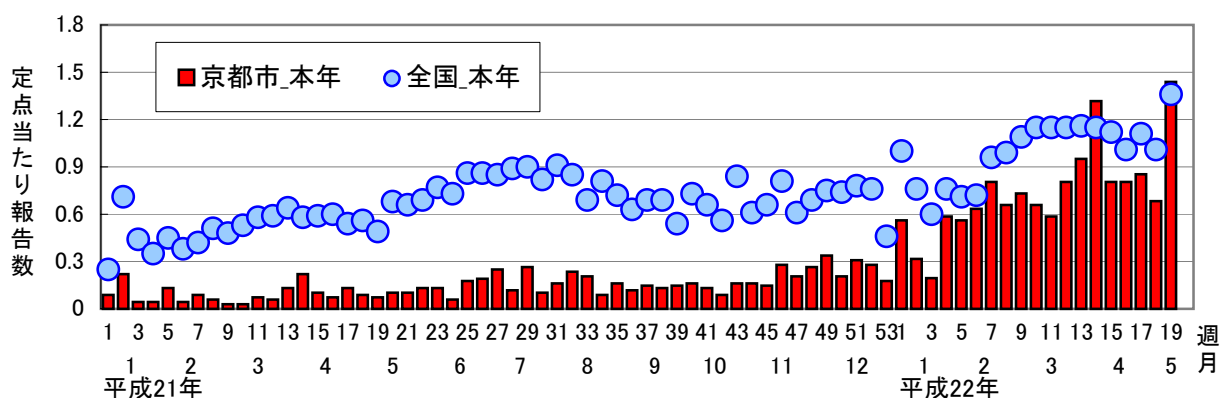
平成21年以降の本市及び全国の推移をみると、特に、本市では、平成22年以降、報告数が増加しています。

過去10年間(平成12年から平成21年)の定点当たり報告数は、数年おきに多くなっていますが、平成19年以降は、定点当たり報告数が少ない状態が続いていました。本年度は、第4週以降、過去5年平均値を上回る状態が続いており、特に、今週は、本市、全国共に報告数が増加しています。今後の動向に注意してください。

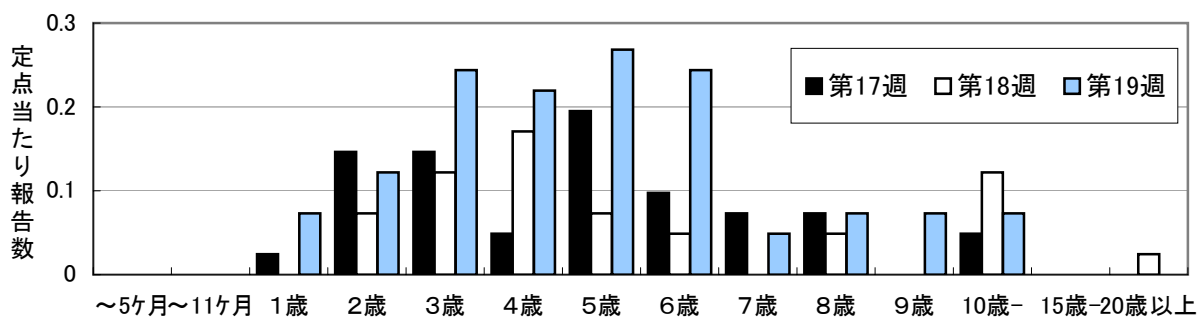
年齢階級別にみると、5歳が11例(18.6%)と最も多く、次いで3歳と6歳が各10例(16.9%)となっています。

行政区別では、伏見区と西京区で多くなっています。

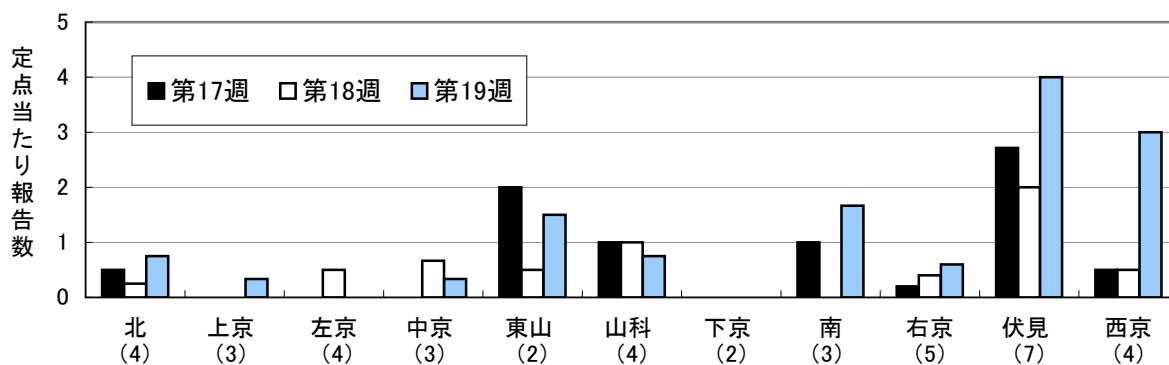
本市及び全国の定点当たり報告数の推移(平成21年及び本年)



年齢階級別定点当たり報告数の推移



行政区別定点当たり報告数の推移



()内は、定点医療機関数